

提出締め切り: 2019年10月16日(水) 23:59:59 JST

提出先: ohya@phys.cst.nihon-u.ac.jp

または駿河台校舎8号館2階823D室

問題1. 順時固有Lorentz変換

Lorentz変換 $x^\mu \mapsto x'^\mu = \Lambda^\mu{}_\nu x^\nu$ は原点からの世界間隔の2乗 $x^2 \equiv \eta_{\mu\nu} x^\mu x^\nu = x^\mu x_\mu = -(x^0)^2 + |\mathbf{x}|^2$ を不変に保つ線形変換で、条件 $\eta_{\mu\nu} \Lambda^\mu{}_\rho \Lambda^\nu{}_\sigma = \eta_{\rho\sigma}$ を満たす4次正方行列 $\Lambda = (\Lambda^\mu{}_\nu)$ で与えられる*1。特に $\Lambda^0{}_0 \geq 1$ かつ $\det \Lambda = 1$ を満たすものを順時固有Lorentz変換と呼ぶ。以下の問いに答えよ。

- (i) 空間座標 \mathbf{x} を球座標表示して $x^\mu = (x^0, \mathbf{x}) = (x^0, |\mathbf{x}| \sin \theta \cos \phi, |\mathbf{x}| \sin \theta \sin \phi, |\mathbf{x}| \cos \theta)$ と書く事にする。この x^μ が原点から時間的に離れている場合 (即ち $x^2 = -(x^0)^2 + |\mathbf{x}|^2 < 0$ の場合), x^μ は次の様に書ける事を示せ.*2

$$x^\mu = \Lambda^\mu{}_\nu x^\nu_{\text{ref}} \quad \text{with} \quad x^\nu_{\text{ref}} = (\text{sgn}(x^0) \sqrt{-x^2}, 0, 0, 0) \quad (1)$$

ここで、 sgn は符号関数で次式で定義される:

$$\text{sgn}(x) = \frac{x}{|x|} = \begin{cases} +1 & \text{for } x > 0 \\ -1 & \text{for } x < 0 \end{cases} \quad (2)$$

また、 Λ は順時固有Lorentz変換の変換行列で、空間回転とLorentzブーストの変換行列 R と B を用いて次の様に表される:

$$\Lambda = RBR^{-1} \quad (3)$$

但し、

$$R = \begin{pmatrix} 1 & & & \\ & \cos \phi & -\sin \phi & \\ & \sin \phi & \cos \phi & \\ & & & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & & & \\ & \cos \theta & \sin \theta & \\ & -\sin \theta & \cos \theta & \\ & & & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} 1 & & & \\ & \cos \psi & -\sin \psi & \\ & \sin \psi & \cos \psi & \\ & & & 1 \end{pmatrix} \quad (4a)$$

$$B = \begin{pmatrix} 1 & & & \\ \frac{|x^0|}{\sqrt{-x^2}} & & \frac{\text{sgn}(x^0)|\mathbf{x}|}{\sqrt{-x^2}} & \\ & 1 & & \\ \frac{\text{sgn}(x^0)|\mathbf{x}|}{\sqrt{-x^2}} & & & \frac{|x^0|}{\sqrt{-x^2}} \end{pmatrix} \quad (4b)$$

ϕ, θ, ψ は力学でも登場するEuler角である。

- (ii) 同様に、 x^μ が原点から空間的に離れている場合 (即ち $x^2 = -(x^0)^2 + |\mathbf{x}|^2 > 0$ の場合) でも、或る順時固有Lorentz変換の変換行列 Λ が存在して x^μ は必ず次の様に書ける:

$$x^\mu = \Lambda^\mu{}_\nu x^\nu_{\text{ref}} \quad \text{with} \quad x^\nu_{\text{ref}} = (0, 0, 0, \sqrt{x^2}) \quad (5)$$

この様な Λ を1つ見つけよ。条件 $\Lambda^0{}_0 \geq 1$ と $\det \Lambda = 1$ は必ず満たすこと。

問題2. 交換子関数

次の自由スカラー場を考える.*3

$$\phi(x) = \int \frac{d^3\mathbf{p}}{(2\pi)^3 2\omega_{\mathbf{p}}} (a(\mathbf{p})e^{ipx} + a^\dagger(\mathbf{p})e^{-ipx}) \quad \text{with} \quad p^0 = \omega_{\mathbf{p}} = \sqrt{|\mathbf{p}|^2 + m^2} \quad (6)$$

*1 この x^2 は「 x^μ の2乗」という意味で、 $x^\mu = (x^0, x^1, x^2, x^3)$ の第2成分 x^2 では無い。紛らわしいが文脈から明らかだからこの記法を使う。また、この授業ではMinkowski計量は一貫して $\eta_{\mu\nu} = \eta^{\mu\nu} = \text{diag}(-1, +1, +1, +1)$ を用いる。

*2 ヒント: $x^\mu_{\text{ref}} = (x^0_{\text{ref}}, x^1_{\text{ref}}, x^2_{\text{ref}}, x^3_{\text{ref}})$ を4成分縦ベクトルと思って左から行列(3)を掛ければ良い。 R は直交行列なので $R^{-1} = R^T$ (T は転置) である事に注意。(実際は R^{-1} は効かないので、式(1)の Λ としては $\Lambda = RB$ でも良い。また、 ψ も効かないので $\psi = 0$ でも良い。)

*3 e^{ipx} は $e^{ipx} = e^{i\eta_{\mu\nu} p^\mu x^\nu} = e^{-ip^0 x^0 + i\mathbf{p} \cdot \mathbf{x}} = e^{-i\omega_{\mathbf{p}} x^0 + i\mathbf{p} \cdot \mathbf{x}}$ の略記。 e^{-ipx} も同様。

但し, $a(\mathbf{p}), a^\dagger(\mathbf{p})$ は次の交換関係を満たす:

$$[a(\mathbf{p}), a^\dagger(\mathbf{q})] = (2\pi)^3 2\omega_{\mathbf{p}} \delta^3(\mathbf{p} - \mathbf{q}), \quad [a(\mathbf{p}), a(\mathbf{q})] = 0, \quad [a^\dagger(\mathbf{p}), a^\dagger(\mathbf{q})] = 0 \quad (7)$$

以下の問いに答えよ.

- (i) 任意の x^μ と y^μ に対して交換関係 $[\phi(x), \phi(y)]$ は次の様に書き表される事を示せ: *4

$$\begin{aligned} [\phi(x), \phi(y)] &= \int \frac{d^3\mathbf{p}}{(2\pi)^3 2\omega_{\mathbf{p}}} \left(e^{ip(x-y)} - e^{-ip(x-y)} \right) \\ &= \int \frac{d^4p}{(2\pi)^3} \text{sgn}(p^0) \delta(p^2 + m^2) e^{ip(x-y)} \end{aligned} \quad (8)$$

この右辺の積分で表される関数をPauli-Jordanの交換子関数と呼ぶ.

- (ii) 任意の x^μ と y^μ に対して交換子関数(8)は次の等式を満たす事を示せ: *5

$$[\phi(\Lambda x + a), \phi(\Lambda y + a)] = [\phi(x), \phi(y)] \quad (9)$$

但し, Λ^μ_ν は任意の順時固有Lorentz変換で, a^μ は任意の定数4元ベクトルである. この等式を (交換子関数に対する) **Poincaré不変性**と呼ぶ.

- (iii) 上のPoincaré不変性を用いて Λ^μ_ν と a^μ をうまく選ぶと, 交換子関数は必ず次の様に書ける事を示せ: *6

$$[\phi(x), \phi(y)] = [\phi(x_{\text{ref}}), \phi(0)] \quad (10)$$

但し,

$$x_{\text{ref}}^\mu = \begin{cases} \left(\text{sgn}(x^0 - y^0) \sqrt{-(x-y)^2}, 0, 0, 0 \right) & \text{for } (x-y)^2 < 0 \\ \left(0, 0, 0, \sqrt{(x-y)^2} \right) & \text{for } (x-y)^2 > 0 \end{cases} \quad (11)$$

- (iv) 上の結果を用いて, 交換子関数は2点 x^μ と y^μ が空間的に離れている場合は必ずゼロになる事を示せ: *7

$$[\phi(x), \phi(y)] = 0 \quad \text{for } (x-y)^2 > 0 \quad (12)$$

この様に空間的に離れた2点で場の演算子が交換する事を微視的因果律とか局所性と呼ぶ.

*4 ヒント: 式(8)の1行目の等号は交換関係(7)を使えばすぐに導ける. 2行目の等号はデルタ関数に対して成り立つ公式

$$\delta(p^2 + m^2) = \frac{1}{2\omega_{\mathbf{p}}} (\delta(p^0 - \omega_{\mathbf{p}}) + \delta(p^0 + \omega_{\mathbf{p}}))$$

を用いてまず2行目の p^0 積分を実行し, 次に第2項目だけ $\mathbf{p} \rightarrow -\mathbf{p}$ と変数変換すると1行目に一致する事から従う.

*5 ヒント: 式(8)の2行目の表式を用いると, 式(9)の左辺は

$$[\phi(\Lambda x + a), \phi(\Lambda y + a)] = \int \frac{d^4p}{(2\pi)^3} \text{sgn}(p^0) \delta(p^2 + m^2) e^{ip[(\Lambda x + a) - (\Lambda y + a)]} = \int \frac{d^4p}{(2\pi)^3} \text{sgn}(p^0) \delta(p^2 + m^2) e^{i(\Lambda^{-1}p)(x-y)}$$

と表せる. ($(\Lambda^{-1})^\mu_\nu = \Lambda_\nu^\mu$ に注意せよ.) 次に変数変換 $p^\mu = \Lambda^\mu_\nu q^\nu$ を施すと, 上の積分は式(8)の2行目(の積分変数が q に置き換わったもの)に一致する事を示せば良い. 変数変換のJacobianは $|\det(\frac{\partial p^\mu}{\partial q^\nu})| = |\det(\Lambda^\mu_\nu)| = 1$ である事, 及び $p^2 + m^2 = 0$ を満たす p^μ に対しては順時固有Lorentz変換は p^0 の符号を変えない事を使う. ちなみに $\Lambda x + a$ は $\Lambda^\mu_\nu x^\nu + a^\mu$ の添え字を省いた略記.

*6 ヒント: まず a^μ の任意性を利用して $a^\mu = -\Lambda^\mu_\nu y^\nu$ と選び, 次に Λ^μ_ν の任意性を利用して問1で用いた順時固有Lorentz変換の逆行列を持って来れば良い.

*7 ヒント: 式(8)の1行目の積分を使って式(10)の右辺を計算すれば良い. 奇関数の $-\infty$ から $+\infty$ の積分はゼロになることを使うと, $(x-y)^2 > 0$ の時はゼロになることが分かる.